

市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残7巻考

— 朝鮮銅活字版の底本を中心にして —

王 連 旺

はじめに

日本の中世五山禅僧は、杜甫、蘇軾、黄庭堅らの作品について講義を行い、抄或いは抄物と呼ばれる講義録を多く残している。特に蘇軾の詩歌に関する抄物が数多くあり、蘇詩研究において重要な価値を有している。

市立米沢図書館には「米沢善本」と称される多くの特別貴重典籍が所蔵されている。そのなかに蘇詩研究の重要な資料である、(1)『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』15冊（請求記号「米沢善本90」）、(2)『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残7巻、8冊（請求記号「米沢善本91」）の2点が収蔵される。(1)は、元刊本で、以下請求記号に従って『米沢善本90』と略称する。また本書第1冊巻頭には朝鮮銅活字版「東坡紀年録」が配補される。これを『米沢90紀年録』と略称する。(2)は、朝鮮銅活字版『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』を貼り込み、その空白部分に「抄」が記されるという特殊な型式で作られている。これを請求記号に従って、その全体を『米沢善本91』と略称し、そのうち朝鮮銅活字版『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』底本を『米沢91集注』、抄の部分『米沢91抄物』と略称する。本稿で考察するのは(2)の『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』、すなわち『米沢善本91』である。この書は、巻19が完全に、巻1と巻20から24までの各巻がそれぞれ半分ほど残存している。なお、元々『米沢善本91』の一部である「東坡紀年録」1巻が『米沢善本90』の冒頭に補配されていることについては後述する。

『米沢善本91』は、朝鮮銅活字版劉辰翁批点本『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』を底本としており、底本の1張の四周の余白を切り捨て、匡郭内の部分を四等分にし（4半張、5行または4行）、それを和紙（36.5×26.2cm、表半丁の左下或いは裏半丁の右下に切られた底本のサイズに合わせて窓枠を作り）に張り込み、和紙の空白部分に、芳、瑞、脞、蘭、天、白、頑、幻、馬、青といった10人ほどの禅僧の底本の内容に対する抄を類聚編纂しており、抄

の種類は蘇詩抄物を集大成した『四河入海』よりも遥かに多い。

『米沢 91 抄物』と『四河入海』とを合わせて研究することは、中世禅林における蘇軾文学の受容の有様をより明らかにするほか、『四河入海』及び各種抄物の研究にとっても重要な資料価値を持っている。またこの書物は朝鮮銅活字版底本と日本抄物資料とが邂逅した稀有な例であり、中国本土以外の地域における蘇軾文学の伝播のルートと範囲、受容の主体と方式といった多方面にわたる課題に対して重要な価値を有している。

本稿では、まず『米沢善本 91』の著録情報を検討し、次に『米沢 91 集注』と『米沢 91 抄物』の形態を記述した上で、成書の時期を比定し、『米沢 91 集注』の復元を試みる。併せて蘇軾文学の伝播と受容における当該書物の意味についても論じる。なお、抄の部分の個別研究については、別稿を期したい。

一、『米沢 91 集注』の版本系統

前述した各種の蘇詩抄物は漢文で書かれたものもあれば、漢字仮名交じり文で書かれたものもある。また中国の旧注を参考にしつつ単注の形で編まれたものもあれば、先行する抄物を集めて編纂を加えたものもある。そのほとんどが劉辰翁批点本『増刊校正王状元集百家注分類東坡先生詩』（以下、この系統のテキストを「類注本」と略称する）を底本として用いているということである。

類注本については既に劉尚栄氏「百家注分類東坡詩集考」⁽¹⁾及び西野貞治氏「東坡詩王状元集注本について」⁽²⁾に詳しい論説がある。それを参考にしつつ、類注本の概要とその変遷を紹介しておく。

南宋中葉に、建安の書肆に王十朋の名を冠する『王状元集注分類東坡先生詩』全 25 巻という注釈書が現れた。蘇軾の詩歌を主題によって 78 門類に分類し、凡そ 96 人の注釈を集めて編纂を加えたものであり、王注本、百家注本、或いは類注本と呼ばれている。傅增湘によれば、類注本は、刊刻以来、「閩中書肆遂爭先鐫彫、或就原版以摹、或改標名以動聽、期於広銷以射利、故同時同地有五、六刻之多（福建省の書肆では争ってそれを刊刻し、原版のまま覆刻するものもあれば、人の注意を引くために書名を変えるものもあったが、いずれも多く販売して利益を得ることを目的としていた。それ故、同時期の同じ地域でも 5、6 種類の版種があった）」⁽³⁾という。傅氏が述べるように、類注本は刊行された初期にすでに多くの版種が現れたが、それは版式或いは書名の異同だけで、体裁や内容はほぼ一致していると考えられる。しかし、後世において類注本は書名、内容及び体裁にわたって大きく変わった。主には以下の 4 系統

がある。

A、『王状元集百家注分類東坡先生詩』25 卷、78 (79) 門類

南宋中葉の版本で、「王十朋龜齡纂集」と題している。この系統で現存する最も古いテキストは中国国家図書館所蔵の黃善夫家塾本である。ほかに、同じ系統のテキストとして、泉州市舶司本、建安万卷堂本及び魏中卿家塾本がある。黃善夫家塾本は 79 門類に分けており、ほかは星河類（1 首のみ）を月類に合併して 78 門類となっている。

B、『増刊校正王状元集注分類東坡詩』25 卷、78 門類

宋末元初に成立したもので、書名に「増刊校正」の 4 文字が加わり、さらに「王十朋龜齡纂集、東萊呂公祖謙分類、廬陵須溪劉辰翁批点」と掲げられるようになり、劉辰翁の批点を「増刊」し、宋人の旧注を若干「校正」し、詩歌の配列にも少し調整を加えている。

C、『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』25 卷、78 門類、無批語

元明の時期に南宋建安本（A 本）を元にして題名を変更し、空白の箇所或いは旧注を削った箇所に「増刊校正」（注釈）を付け加えている。「王十朋纂集」としているが、「呂祖謙分類」が記されていない。

D、四庫本『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』32 卷、29 門類

明代の万暦年間、散文家の茅坤の次男である茅維によって、類注本の内容から体裁までに及ぶ大きな修訂が行われた。茅維は元々の 25 卷を 32 卷に、78 門類を 30 門類に編集し、また、『和陶詩』、『東坡続集』から原書未収の詩歌を増加したり、古い注釈を 10 万余字削除したり、いたずらに注釈者の氏名を変更したりして、宋、元の類注本の本来の姿を失わせた。また、清の康熙 37 年、新安の朱從延は茅維のテキストを底本にして、類注本を刊行したとき、「酬和」と「酬答」の二類を一類にしている。それで、類注本は 29 門類、32 卷となった。これがすなわち『四庫全書』に著録されたテキストである。

上記 4 種の類注本の中で、最も広く伝わったのは B 本である。このテキストは王十朋、呂祖謙、劉辰翁の影響力を借りて元、明の時代において多く刊刻され、朝鮮や日本に多く伝わった。また、朝鮮では木版、銅活字版、日本では五山版、和刻本などの形で刊行され、同時期の東アジア漢字文化圏における蘇詩の伝播と受容の共通のテキストと言える。更に、中世日本において盛んに行われた五山禅僧の蘇詩講抄は多くこれを底本として用いた。本稿で取り扱う『米沢 91 集注』はこの系統のものである。

二、先行研究

一般的な抄物資料の形態は、テキストの余白或いは行間に書入れを記入し、本文に訓点・朱点・朱引などを施した覚書、禅僧の講義録を整理して抄写した古鈔本、『四河入海』のように数種の抄物を集めて編纂し、鈔本や古活字で印刷したものも抄物資料と称される。ところが、『米沢善本 91』はこれら従来の抄物資料と異なり、底本と抄との融合性或いは一体性が形態上において弱い。柳田征司氏は抄物資料を紹介する書目を制作しているが、『米沢善本 91』は著録されていない⁽⁴⁾。

『米沢善本 91』を著録した最も早い書目は嘉永 2 年 (1849) 頃成立の『興譲館書目』である。当該書目の集部 42 番に「東坡集 八冊」⁽⁵⁾と著録されるのは『米沢善本 91』であろう。次に、明治 28 - 33 年 (1893 - 1900) 頃成立の『興譲館蔵書目録』漢土部・別集類に「東坡詩集 八巻」⁽⁶⁾と著録されている。『興譲館書目』及び『興譲館蔵書目録』は、書名と冊・巻数を記録する簡略な書目であり、巻数の存佚状況については言及されていない。『米沢善本の研究と解題』所収明治 41 年成立の『興譲館旧蔵和漢書目録』⁽⁷⁾ 解題になると、次のように著録されている。

『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残 7 巻、附「紀年録」1 巻。宋蘇軾撰、宋王十朋集注、宋劉辰翁批点、「紀年録」宋傅藻撰、朝鮮活字印本、存巻 1、第 19 至 24、8 冊⁽⁸⁾。

新たな情報を追加しているものの、テキストの精査はなされていない。巻 1、巻 19 から 24 までの 7 巻が存していることを記述しているが、完全な状態で残っているのは実は巻 19 のみであり、ほかの 6 巻はそれぞれ半分程度しか残っていないことについてはすでに指摘した。なお、「紀年録」も今の『米沢善本 91』には見えない。このように、『興譲館旧蔵和漢書目録』は『米沢 91 集注』だけに解題を施しており、『米沢 91 抄物』については記述していない。

『米沢善本の研究と解題』になると、『米沢 91 抄物』の情報が補足される。

前に王十朋序、西蜀趙夢符あり。毎葉行 17 字、注双行。原本 5 行ずつ、稀に 4 行に切りとって和紙の縦 36.7 糎、横 25.1 糎のものに隔葉に貼りつけ、漢文或は細字片仮名交じり文のいわゆる抄を細写した。その抄は瑞溪の『脞説』、万里の『天下白』、太岳の『翰苑遺芳』と瑞巖、天隱、蘭坡、河濟、月舟などの説がある。惜しいことに巻第 1 と巻第 19 より第 24 にいたる 7 巻を存するのみ。凡そ 1187 葉。毎冊に「米澤藏書」印あり⁽⁹⁾。

この解題は、『興譲館旧蔵和漢書目録』より「紀年録」を削除しており、こ

の点で正確な取扱いがされていると言えよう。しかし、巻数については『興譲館旧蔵和漢書目録』の記述を踏襲している。『米沢 91 抄物』に関する情報も不十分である。例えば、抄の種類は解題が言及する 8 種にとどまらない。ほかにも青、馬の 2 種の抄がある。「凡そ 1187 葉」は筆者の調査では 1190 葉である。また、「横 25.1 糎」は筆者による調査では 26.2cm である。倉田淳之助氏は「東坡抄と山谷抄」⁽¹⁰⁾においても『米沢 91 抄物』について考察をしたが、巻数、丁数などについては同様の記述である。

以上の書誌著録において共通することは、『米沢善本 91』について、版式の一部のみを記述しているに過ぎないということである。『米沢 91 抄物』についての記述については、なお補正すべき箇所がある。

最後に、明治 44 年に、財団法人米沢図書館によって編まれた『珍書目録』の解題を紹介する。この書目の集之部に『東坡詩集』を著録しており、「朝鮮活字本、毎行 17 字、縦 1 尺 2 寸幅 8 寸 7 分の大本ナリ、毎紙原紙ヲ糊貼シ欄外ニ解釈ヲ細書ス、蓋シ五山僧徒ノ講座用ニ供シタルモノナリ、毎巻「米澤藏書」ノ朱印アリ」⁽¹¹⁾と説明している。この解題は『米沢善本 91』について、『集注』と『抄物』の両方に言及しており、両者を合わせてこのテキストの形態を述べている。しかし、巻数については記述していない。また『米沢善本 90』についての解題に、「活本東坡紀年録ヲ合綴ス」⁽¹²⁾と指摘しているが、『米沢 90 紀年録』と『米沢善本 91』の関係については言及していない。ここから目録編纂者の慎重な態度が見えるであろう。総じていえば、従来の書目では、『珍書目録』の解題が最も慎重かつ重要な目録だと考えられる。

三、成書時期と蘇軾受容研究に対する意味

『興譲館旧蔵和漢書目録』ではすでに『米沢 91 集注』は朝鮮銅活字本であることを指摘しているが、字様及び成立については言及されていない。ここでは、『米沢 91 集注』、『米沢 90 紀年録』と 3 種の初鑄甲寅字テキストの字様を比較することによって字様の判定を行う。3 種の字様は次の通りである。

字様 A、『増刊校正王狀元集注分類東坡先生詩』巻 3 第 23a 残葉、世宗 16 年 (1434) 初鑄甲寅字 (Gab - in ja)⁽¹³⁾。字様 B、『真西山讀書記乙集上』「大学衍義」巻 15 第 1 張、世宗 16 年初鑄甲寅字⁽¹⁴⁾。字様 C、『分類補注李太白詩』巻 23 第 1 張、世宗 16 年初鑄甲寅字⁽¹⁵⁾。

比較した結果、『米沢 91 集注』、『米沢 90 紀年録』の字様を初鑄甲寅字と判定した。こうなると、『米沢 91 集注』と『米沢 90 紀年録』はいずれも 1434

年以降に印刷されたことが分かる。また、字様の墨色、魚尾などから見れば、初鑄甲寅字の初期印本と推測して良からう。従って、『米沢 91 集注』と『米沢 90 紀年録』は 15 世紀 40 年代前後に成立したものと推測される。

次に第 7 冊第 13 丁オに記された次の墨識を手掛かりに『米沢 91 抄物』の成立時期を考察する。

天正十三酉雲、月松鶴老衲、行年七十五歳、殘命不期明朝、形見之為書之。不忽道者（花押）。付与宗虎上座。（天正十三酉雲、月松鶴老衲、行年七十五歳、殘命は明朝を期せざらんとし、形見の為に之を書す。不忽道者（花押）。宗虎上座に付与す。）

これによれば、『米沢 91 抄物』は天正 13 年 (1585)8 月に月松鶴によって書かれて宗虎に付与したものであることが分かる。『景勝公御年譜』巻 18 慶長元年 (1596) 冬 11 月条に、「林泉寺九世ノ住職月松宗鶴和尚示寂ス、時ニ八十五歳、和尚往昔公ニ於テ帰依ノ僧ナリ、說法ノ暇時々軍使ノ事ヲ務メシカハ、公ニモ常ナラス愁傷ノ御眉ヲ攢玉フ」⁽¹⁶⁾ とある。禅僧の名の三字目は系字または通字・偏諱と言ひ、自称する場合によく省略する。地域や時間の面からみても、月松宗鶴という曹洞宗林泉寺 9 世の住職は墨識にある月松鶴のことであろう。一般に、外典文学の講読に参加したのは臨済宗の禅僧を主としており、曹洞宗禅僧の外典文学参与に関する江戸時代以前の文献資料は極めて少ない⁽¹⁷⁾。この点から見ると、『米沢 91 抄物』は曹洞宗禅僧の外典文学参与に関する初期文献としての価値を有していると考えられる。

以上の考証によって導き出された『米沢 91 抄物』と『米沢 91 集注』の成立時期から見ると、『米沢 91 集注』の日本伝来の時期の上限を 1434 年、下限を 1585 年と推測して良からう。日韓書籍流通に関して藤本幸夫氏は『日本現存朝鮮本研究』⁽¹⁸⁾ の「前言」において、「我が国には多くの朝鮮本が存在する。その経緯は複雑であるが、时期的には大きく分けて、（一）室町末以前の伝来本、（二）豊臣秀吉朝鮮侵略時の将来本、（三）江戸時代対馬宗藩を通じての伝来本、（四）明治以降の書肆・学者による購入本、と考え得るであろう」と伝来時期によって日本現存の朝鮮本を大きく 4 種類に分けている。また室町末以前伝来本について、「この時期の書籍で現在日本に多く伝わるのは、『大蔵経』である。……仏典以外で存するのは例外的で、「太宰大二」及び「日本国王之印」の両印を鈴した『三綱行実図』や『駱賓王集』はその例外に属すと言えよう」と述べている。これによれば、室町末以前に日本に伝わってきた朝鮮の書籍は『大蔵経』といった仏教内典を主としており、『三綱行実図』や『駱

寶王集』のような少数の外典文献も例外として日本に伝来した。『三綱行実図』と『駱賓王集』は銅活字版ではないので、『米沢 91 集注』は室町末以前に日本に伝来した銅活字版文献として、日韓書籍流通史において重要な意味を持っていると思われる。

『米沢 91 集注』の日本伝来年月は不明であるが、可能性として次に『朝鮮王朝実録・燕山君日記』7 年（1501）9 月 17 日条⁽¹⁹⁾の記述を挙げておく。

日本国使臣弼中、智瞻等求『東坡詩集』、『碧巖録』、『黄山谷』等冊、命給之。『碧巖録』未知何冊、其問於弼中。（日本国の使臣弼中、智瞻ら『東坡詩集』、『碧巖録』、『黄山谷』等の冊を求め、命じて之を給わしむ。『碧巖録』未だ何の冊なるかを知らず、其れ弼中に問う。）

この記述によれば、1501 年に『東坡詩集』は朝鮮より確実に日本に伝わった。この『東坡詩集』が『米沢 91 集注』であるかどうかは不明であるが、可能性としては十分に考えられる。

以上から、日本に伝来した蘇軾の作品集は直接中国本土から齎されたものばかりでなく、朝鮮経由で齎されたものもあり、禅僧は両者を使用したことが確認される。15 世紀の日本における蘇軾文学伝播と受容は京都にある臨済宗の禅僧を中心として行われたが、本節の考証により、16 世紀後半に至ると越後（新潟県）の曹洞宗の禅僧が蘇軾抄物を整理するまでに至ったことが明らかになった。

四、形態の著録と分析

『米沢善本 91』の形態は以下の通りである。なお、説明を要する箇所に【 】で番号を付けて、著録情報の後に置くこととする。

〈市立米沢図書館 米沢善本 91〉

『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』〔25 卷、附紀年録 1 卷（『米沢善本 90』首に配補）〕【一】 存卷 1（闕後半）、19（全）、20（闕後半）、21（闕前半）、22（闕後半）、23（闕前半）、24（闕前半）。8 冊。

後補焦茶色雷文繫唐草文艶出表紙（36.5 × 26.2cm）、左肩後補題簽に本文別筆にて「東坡詩集 冊数」と墨書す。右肩（第 1 冊のみ）に米沢善本蔵書票を貼付し「91」と書す。改装【二】、袋綴、五針眼綴じ。本文楮紙。前後見返し。

『米沢 91 集注』、宋蘇軾著、宋王十朋集注、宋劉辰翁批点、宋傅藻撰「紀年録」、朝鮮銅活版、初鑄甲寅字【三】。首四半張は第 1 冊 10 丁オ左下に貼付し、首行に「増刊校正王状元集注分類東坡先生詩卷之一」（大字）と題し、次行は

「宋禮部尚書端明殿學士兼侍讀學士贈太師諡文忠蘇軾」（低三格、中字）と著者名を、三行は「廬陵須溪（小字）劉（大字）辰翁（小字）批點（大字）」（低八格）と批点者名を記す、以下本文。半張5行或いは4行、一張は5行+5行、または5行+4行の形である。行17字、小字双行、批点有り。匡郭25.0×8.5cm（5行）/7.3cm（4行）。大黒口、三魚尾、版心上下二段、上段題坡詩及卷数、下段題張数【四】。自注、注釈者名、批などの提示語は陰刻である。第1冊、本文及び空白箇所・行間に朱点・朱引や墨筆による返り点、送り仮名、音合符（中線）、訓合符（左側線）、傍注・傍訓、批注などがある。また、同一の漢字（語彙）に複数の訓み方がある場合、朱・墨にて両側に傍訓を併存する【五】。第2冊以降、ほぼ朱筆のみである。

『米沢91抄物』巻首に「増刊校正王状元集注分類東坡先生詩卷之一」と題し、巻19、20、22の首行に「東坡卷之幾」と略題を記す。半丁17行、行40字前後、同筆行楷書体。上下に横線を引く。上下余白縦1-2cm。被解釈語を朱筆方形で囲み、注釈者或いは注釈書の代表の一文字（朱或いは墨）を挙げ、朱筆または墨筆で囲む【六】。

跋文・刊記無し。墨識①第1冊第33丁オ「三条院藏人」、②第7冊第13丁オ「天正十三酉雲月松鶴老衲行年七十五歳 / 殘命不期明朝形見之為書之 / 不忽道者（花押） / 付与宗虎上座」。毎冊首に長形陽刻「米澤藏書」朱印記を存す。

各冊丁数、第1冊、165丁。第2冊、176丁。第3冊、172丁。第4冊、156丁。第5冊、121丁。第6冊、154丁。第7冊、135丁。第8冊、111丁。計1190丁。

【一】劉辰翁批点本『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』は全25巻である。すでに述べたように、「紀年録」1巻が同館所蔵の『米沢善本90』の冒頭に配補されていた。これを判定する理由は、まず『興譲館和漢書目録』の解題に記載されていることから、米沢図書館に所蔵される可能性が最も大きいと言える。更に、「米沢91集注」と「米沢90紀年録」の料紙、版式、字様などの諸方面から比較してみれば、両者が同一テキストであることは判断できる。

【二】『米沢善本91』の装釘を改装と判断した根拠を示す。第3冊第1丁オ左肩に本文同筆にて「東坡先生詩十九之中」とあることから、元々巻19を上、中、下の3冊に分けた形であり、後に3冊を2冊に改装したと推測できる。また、第3冊172丁は落丁であり、当該丁の書脳部下方（綴じ目で見えないところ）に「ろ七十七、ろ六十六（二重線）」とあり、先に二重線で「ろ六十六」を消して、その上方にまた「ろ七十七」と改めた。「ろ」は何を意味して

いるか不明であるが、数字を丁数と理解して間違いないであろう。この「七十七」という丁数は改装後の第 172 丁と一致していないことから、巻 19 が改装された証拠になる。ほかの巻の場合は、題箋の字様と本文の字様と別筆であることから改装の可能性が大きいと判断する。

【三】字様については、「三、成書時期と蘇軾受容研究に対する意味」において判定を行った。

【四】匡郭・版心は改装時に書き添えたものであり、墨で匡郭を書き添えて貼り目を隠す意図が窺える。

【五】多くの場合は、両側とも墨筆で異訓を併存するが、右側は墨筆、左側は朱筆を以て記す場合もある。

【六】『米沢 91 抄物』には、芳（大岳周崇、1345 - 1423、『翰苑遺芳』、墨名朱圀）、瑞（瑞巖竜惺、1384 - 1460、朱名墨圀）、脞（瑞溪周鳳、1392 - 1473、『脞説』、墨名朱圀）、蘭（蘭坡景苗、1417 - 1501、墨名墨圀、少量墨名朱圀）、天（天隱竜澤、1422 - 1500、墨名墨圀、少量墨名朱圀）、白（万里集九、1428 - ?、『天下白』、墨名朱圀）、頑（河清祖瀏、1460 ? - ?、『豚雲集』、墨名墨圀、少量墨名朱圀）、幻（月舟寿桂、1470 - 1533、別号幻雲、墨名墨圀、墨名朱圀）、馬（調査を要する、朱名墨圀）、青（調査を要する、墨名墨圀）、題（南宋の施宿が蘇詩に付けた題注、墨名朱圀）及び「○」で示すものなど、凡そ 10 種の抄が含まれている。

五、『米沢 91 集注』復元の試み

前述のように、『米沢 91 集注』は一部だけが存しており、また切られて和紙に張り込まれて元々の様態を失っている。従って、これを復元するには（一）版本の復元、（二）内容の残佚整理の二つの面から行う必要がある。

そこでまず、『米沢 91 集注』と以下二種のテキストとを比較することによって、版本の復元を試みる。

比較（一）、『米沢 91 集注』巻 1 の 1a1・1a2 と日本国立国会図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』⁽²⁰⁾ 巻 1 の 1a とを比較することによって、二種のテキストが同じ系統のものと判断した。

比較（二）、国立国会図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』巻 3 の 26a と同館所蔵の『東国古活字譜』第 1 張（『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』巻 3 の 26a 残葉）⁽²¹⁾ とを比較することによって、二種のテキストが同じ系統のものと判断した。（一）（二）の結果により、『米沢 91 集注』と国

立国会図書館所蔵の二種のテキストとが同じ系統のものに属していると判断し、以下、3種のテキストを参照しつつ、『米沢91集注』の版本と内容を復元する。

原表紙色不詳(28.3×21.7cm)、題箋はないか。五針眼綴法か。第一冊「増刊校正百家註東坡先生詩序」4張(1-2a 王十朋序、2a-4b 趙夔序)、「増刊校正王狀元集註分類東坡先生詩姓氏」5張、「増刊校正王狀元集百家註分類東坡先生詩目錄」70張、「東坡紀年録」27張。

半張9-10行、行17字、小字双行。四周单边、有界、批点有り。匡郭25.0×17.0cm。双魚尾、白口、版心上方題「坡詩幾」、下方題張数。

各巻張数及び存佚状況、「増刊校正百家註東坡先生詩序」(4張、底本闕4張)。「増刊校正王狀元集註分類東坡先生詩姓氏」(5張、底本闕5張)。「増刊校正王狀元集百家註分類東坡先生詩目錄」(70張、底本闕70張)。「東坡紀年録」(27張、底本存27張(『米沢善本90』第1冊首に配補))。巻之一(50張、底本存1-21張、22a)、紀行詩92首、存「奉詔減囚禁記所經歷」至「発広州」50首、闕「初到惠州」至「過海得子由書」42首。巻之二(38張以上、底本全闕)述懷6首、詠史8首、懷古2首、古跡37首、時事2首。巻之三(48張、底本全闕)宮殿17首、省宇8首、陵廟3首、墳塋3首、居室14首、堂宇41首。巻之四(51張、底本全闕)城郭2首、壁塙2首、田圃8首、宗族5首、婦女11首、仙道16首、积老上40首。巻之五(47張、底本全闕)积老下16首、寺觀59首。巻之六(38張、底本全闕)塔4首、節序43首、夢10首、月星河附17首。巻之七(59張、底本全闕)雨雪46首、風雷8首、山岳36首。巻之八(50張、底本全闕)江河10首、湖26首、泉石31首、溪潭10首。巻之九(44張、底本全闕)池沼3首、船楫2首、橋梁3首、樓閣27首、亭榭45首。巻之十(46張、底本全闕)園林55首、果実9首、燕飲上27首。巻之十一(50張、底本全闕)燕飲下17首、試選8首、書画63首。巻之十二(46張以上、底本全闕)書画下51首、筆墨9首、硯8首、音楽11首。巻之十三(46張、底本全闕)器用10首、灯燭3首、食物5首、酒12首、茶12首、魚6首、竹3首、木11首。巻之十四(36張以上、底本全闕)花79首、菜5首、菌蕈1首。巻之十五(38張、底本全闕)投贈27首、戲贈32首。巻之十六(48張以上、底本全闕)簡寄59首、懷旧上21首。巻之十七(54張、底本全闕)懷旧下13首、尋訪17首、酬答上59首。巻之十八(61張以上、底本全闕)酬答中91首。巻之十九(83張、底本存83張)酬答143首。巻之二十(46張、存1至30張)惠貺35首、送別上39首。底本存惠貺35首、送別上「送曾子固倅越得燕字」至「送張職方吉甫赴閩曹」16首、闕「送張軒民寺丞赴

省試」至「送李公恕赴闕」23首。卷之二十一（53張、底本存26至53張）送別中75首。底本闕「送鄭戸曹」至「送表弟程六知楚州」41首、存「送王伯敷守號」至「送子由使契丹」34首。卷之二十二（52張、底本存1至32張）送別下56首、留別14首、慶賀15首。底本存送別下「送苛嵐軍通判葉朝奉」至「送仲素寺丞致政歸潛山」51首。卷之二十三（52張、底本存25至52張）遊賞56首、射獵5首、題咏上32首。底本存遊賞「上巳日出遊隨見作句」至「柳子玉以詩邀遊金山」19首、射獵5首、題咏上32首。卷之二十四（63張、底本存38至63張）題咏下42首、医薬3首、卜相2首、傷悼49首、絕句21首、歌10首、行3首。底本存傷悼「王鄭州挽詩」至「弔徐德占」13首、絕句21首、歌10首、行3首。卷之二十五（38張以上、底本全闕）雜賦94首。

おわりに

本稿は著録情報における補訂すべき箇所を指摘した上で、『米沢善本91』の形態を記述し、版本を同定し、『米沢91集注』の構成を具体的に復元した。

『米沢善本91』は15世紀40年代前後に印刷された初鑄甲寅字銅活字本であり、1585年以前に越後に伝わり、曹洞宗の月松宗鶴が数種の東坡詩抄を類聚編纂した時に、底本として用いられた。1585年8月に、月松宗鶴は『米沢善本91』を完成して宗虎に付与した。中世日本において蘇軾文学研究の担い手は主に臨済宗の禅僧であり、受容の地域は京都が中心であった。本稿では、16世紀後半頃、蘇軾文学は既に越後にまで伝わり、そして曹洞宗禅僧も蘇軾文学の研究に参与したことを論証した。本稿ではまた、蘇軾の詩文集が中国本土のみならず、豊臣秀吉の朝鮮出兵以前に朝鮮から既に銅活字本のテキストの伝来があったことも論証した。朝鮮の銅活字本のテキストと日本の抄物との結合は東アジアにおける蘇軾文学受容の新しい形態を形成した。これは東アジアにおける蘇軾の詩文集の流布のあり方を研究する絶好の資料と言ってもいい。

本稿は『米沢善本91』について初歩的な考察をし、幾つかの問題点を明らかにした。本稿で論ずることが叶わなかった『米沢91集注』と宋元版との関係、日本伝来の具体的な年月と方式、韓国・日本所蔵の同系統の印本との関係、及び『米沢91抄物』の注釈に対する個別研究などについては、今後の課題としたい。

注

- （1）劉尚栄『蘇軾著作版本論叢』（巴蜀書社、1988）54－86頁。

- (2) 『人文研究』(第 15 巻第 6 号、1964) 61 - 87 頁。
- (3) 傳増湘「宋建本百家注蘇詩跋」(『藏園群書題記統集』巻 4、国家図書館古籍題跋叢刊第 25 冊、北京図書館出版社、2002) 592 頁。
- (4) 「書込み仮名抄一斑」(『愛媛大学教育学部紀要』第 2 部第 9 巻、1977 年、1 - 20 頁) に、書入れ仮名抄資料の目録が制作されており、計 95 点の資料(集部の資料計 29 点)が収められているが、『米沢善本 91』を含めていない。また、氏は「書入れ仮名抄」(『室町時代資料としての抄物の研究』第 1 章第 4 節、215 - 230 頁)において、計 509 点の書入れ仮名抄を確認し得ていたと述べ、その内集部が 81 点あるが、『米沢善本 91』が収められているかどうかは不明である。
- (5) 朝倉治彦監修・岩本篤志編集『米沢藩興譲館書目集成』第 2 巻、ゆまに書房、2009 年、92 頁。
- (6) 上掲注 (5) 第 3 巻、226 頁。
- (7) 「興譲館旧蔵和漢書目録」とは、明治 41 年財団法人米沢図書館が設立と同時に教育財団興譲館から受けた書籍目録「興譲館蔵書並寄贈書目録」を基礎にして作成されたものである。
- (8) 『米沢善本の研究と解題』(市立米沢図書館・ハーバード燕京同志社東方文化講座委員会編、1958) 220 頁。
- (9) 上掲注 (8)、158 頁。
- (10) 上掲注 (8)、95 - 108 頁。
- (11) 『珍書目録』(財団法人米沢図書館編、1911) 16 頁。
- (12) 上掲注 (11)、第 16 頁。
- (13) 国立国会図書館蔵『東国古活字譜』第一張、請求記号：WB31 - 12。
- (14) 韓国図書館学研究会『韓国古印刷史』(同朋舎、1978) 145 頁。
- (15) 上掲注 (14)、147 頁。
- (16) 米沢温故会『上杉家御家譜』第 3 巻(原書房、1988) 126 頁。
- (17) 柳田征司氏は「洞門抄物『聯珠詩格抄』について」(『室町時代資料としての抄物の研究』第 9 章第 5 節、1189 - 1120 頁)において取り扱う丈六寺所蔵の『聯珠詩格抄』は永禄 11 年に書写されたものであり、曹洞宗禅僧による外典参与の極めて早い例である。張伯偉氏『注石門文字禪』(釈惠洪著、廓門貫徹注、張伯偉・郭醒・童嶺・卞東波点校、中華書局、2012)の「前言」に、曹洞宗禅僧の外典注釈活動に参与したことについて紹介があり、江戸時代前期における曹洞宗禅僧の外典注釈活動に参与した実例として、独庵玄光は『譚語』において儒家經典及び『老子』、『莊子』、『列子』、『漢書』、杜詩、韓愈詩の字句について注釈していることを挙げており、また廓門貫徹の『注石門文字禪』そのものは臨済宗の惠洪の詩文集に注釈を付け加えたものである。
- (18) 藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究 集部』(京都大学学術出版会、2006)。
- (19) 国史編纂委員会『朝鮮王朝実録・燕山君日記』巻 41(探求堂、1969) 452 - 453 頁。
- (20) 請求記号：820 - 27。

(21) 請求記号：WB31－12。

(筑波大学大学院)

【付記】 閲覧の御許可を頂いた市立米沢図書館、国立国会図書館古典籍資料室、慶應義塾大学斯道文庫及び御教示を賜った先生方に深甚なる感謝を申し上げます。